

南宋期の紀行文に於ける時空間表現をめぐって

——表現行為としての記録——

大西陽子

はじめに

南宋期の紀行文の最も際立った特徴は、日記形式による表現形態が確立するという点である。この日記形式による紀行文は、唐の李翱の『来南錄』、北宋の歐陽修の『于役志』などの先行する作品は僅かながら残存するが、これらは概ね極めて簡略な備忘録的な記述であり、文学作品として完成されているとはいえないものである。それに対し南宋期に入り、とりわけ孝宗・光宗の治世（一一六三—一一九四）には、南宋の四大家のうちの二人である陸游・范成大及び周必大という全く同世代でしかも互いに交遊をもつ彼らが担い手となることによって、急激に盛行するようになる。中でも陸游の『入蜀記』、范成大的『呉船録』は紀行文の両雄として並び称され、明清時期の膨大な数に及ぶ紀行文の範として多大な影響を与え、日記形式の紀行文のスタイルを形成したばかりでなく、同時に確立したと言っても過言ではあるまい。

余惟^{おも}ふに遊記の源は蓋し史家の支流より出づるならむ。宋以後作者踵接すれども、然れども往往にして瑣屑穢雜法戒に關はること無し、故に石湖・放翁より外、伝はる者甚だ寡し。（陸心源「楊氏日記序」『儀顧堂集』卷五）

南宋期の紀行文に於ける時空間表現をめぐって

宋の陸務観・范石湖は皆な記を作るの妙手たり。一に入蜀記有り、一に呉船記有り、三峡の風物を載すに丹青の図画に異ならず。之を読み躍然たり。(何字度『益部談資』巻上)

『入蜀記』は陆游唯一の紀行文。乾道五年(一一六九)に夔州(四川省奉節県)の通判に任命され、半年後故郷山陰(浙江省紹興市)を後に長江を遡って蜀に到る旅の記録。一方、『呉船録』は成都(四川省成都市)の長官であった范成大が、大病にかかったため淳熙四年(一一七七)故郷蘇州(江蘇省呉県)に帰省する際の旅の記録。方向の違いこそあれ、いずれも長江の船旅である。『呉船録』は『入蜀記』に後れること八年程で、『入蜀記』を参考にしたと言われているが、范成大にはそれ以前に『攬轡録』『驂鸞録』というやはり日記形式による紀行文が書かれている。これらは「石湖三録」と総称される。本小論では、南宋期の紀行文を考える上でこの『入蜀記』『石湖三録』を中心に取り上げていきたい。

一

旅を主題とする文学作品は、古来類書・総集などに於いては旅の性質上二つに大別して考えられている。『文選』の体に倣えば〈紀行(行役)〉〈遊覧〉という分類になろう。〈遊覧〉がある一地点に於ける自然の情景やそこでの作者自身の感慨などを記述の対象とし、目的地に赴くまでの行程はさほど問題にならないのに対し、〈紀行〉は長期間に亘る旅の空間移動を作者の足跡に沿って描いていくものであるため、作者の自叙伝的記録性を包含するという点に両者の大きな相違が見られよう。南宋期の日記形式による紀行文は、旅の性質という点からすれば、勿論〈紀行〉に属するものである。この点に留意して、何故南宋期以降紀行文が日記形式を採るようになったのかという問題から論を進めていきたい。

この一見当然とも思われる日記と紀行の結びつきは、まず第一に、旅という作者自身の実際の体験の記録であること

と深く係わつていよう。記録という表現行為である以上、記録の対象としての事象が既に起こった後の時点で書かれるものであるが、これが日記という形式を採る場合には、一日の事象（行動）を回顧して記録することの連続的な反復行為となる。日記はこのように一日という限られた期間の記録の積み重ねであり、しかも事象とほぼ並行して即時的に書かれることによって、非虚構的で極めてリアルな記録となるのである。

漢代から六朝期にかけては〈紀行〉の旅は賦の形式によって盛行した。この〈紀行賦〉の場合は、長期間に亘る旅の展開を追いながらも、作者の視点は後のある一時点から旅全体を総括的に回顧した形をとる。それに対して、日記形式の紀行文は時間の推移と共に作者の視点が移行し一日毎の回顧となるため、読者が時間の流れに沿って旅の展開を読み進めていく上で、作者の視点との差異が少なく、追体験が容易な作品形態であるという特質を有していると言えよう。勿論、〈紀行〉をよりリアルに再現しようとするならば、日記形式が適していることは言うまでもない。だが吉川幸次郎氏が言及しているように、「中国文学史の正式な開幕である前後漢の時代、賦はほとんど独占的な文学形式であつた」⁽¹⁾ため、主題如何に係わらず、文章による文学形式は、ほとんどア・プリオリに賦という制約を受けていたものであり、日記形式が文学作品の表現形態として許容されるほどに時代が熟していなかったと考えられる。

今日我々が考えるような私的で自照的な日記の形態が一般に行なわれるようになるのは、公的記録に比べると時代的にかなり後れる。日次の記録として先ず想起するものは〈起居注〉である。〈起居注〉とは史官が天子の言行を毎日記録したものであり、日記の起源に当たるものは、このような史官の手によって書かれた朝廷での政事や儀式の公的記録である。全く私的な日記が書かれるようになるのは北宋期頃⁽²⁾からであり、南宋期には既に士大夫の一般的な習慣となっていたと考えられる。そして更に南宋期の紀行文の盛行によって、文学作品としての一表現形態ともなるのである。

このように日記が公的記録から派生したという事実は、南宋期の紀行文を考える上で一つの示唆を与えてくれる。南

宋期で最も数多くの日記を作品化して残しているのは周必大である。彼の初期の日記は『辛巳親征録』『壬午龍飛録』(傍点筆者)という書名からも首肯できるように、彼が起居郎という史官の役職にあった時の在朝記録である。そして范成大もまた起居郎の位で金国に使者として赴いた時の公的記録である『攬轡録』をきっかけとして、私的な旅についても日記を作品化するようになるのである。⁽³⁾ こうした経過があつてのことか、南宋期に於けるのみならず、以降の中国の日記形式による紀行文は、作者の実際の体験を述べた記録文学として継承されている。この点は、わが国の『土佐日記』や『更級日記』を代表とする紀行文が虚構的要素を許容しつつ日記文学という一ジャンルを築いたことと一線を画するものである。

日記形式による紀行文は、元来の備忘録としての日記(以下原日記と称す)に基づいて作品化されたものであり、作品化に際して、作者の一日毎の視点に加えて更にもう一段階編集時の総括的な視点が介入する。原日記それ自体は大抵読者を想定しない個人的な備忘録として書かれるものであり、その記述内容はその日一日の実際の見聞の事実という偶然性に左右されるものである。従つて読者に供したいと考えられる非日常的な体験の期間の日記が意図的に抽出され編集されるのである。紀行の場合予めある程度予測のできる体験であるため、作品化することを前提として日記を書くことが可能であり、むしろ意識して書かれることによって、即時的な記録性と、一見それと相反するかに思われる修辭性とが融合し文学性がもたらされるのであろう。

では、作品化された日記は、どのような点で原日記と区別されるのであろうか。先述したように、原日記は毎日の記述の連続的な反復行為のエクリチュールであり、勿論物理的に途中で中断したりする場合も考えられるが、基本的には無期限に連続するはずのものである。しかし作品化された日記は、ある特定期間が閉じられた作品空間として一定の境界線をもつ完結性のある日記である。しかもそれは日記の断片として存在しているのではなく、あくまで一つの主題に

沿って編集されたものである。紀行文に関しては、当然旅の展開つまり旅の経過そのものが主題であり、作者が設定した出发点から到着点までの期間が作品空間に当たる。

このように編集作業の手が加わることによって、元来一日一日の記述が独立し、その間に境界線を持っていたはずのものが、旅という主題に沿って展開する一つの連続した記述と見做されるようになる。この作用は勿論作者が意図的に用いた効果であるが、読者の読むという行為を通して初めて成り立つのである。日付を例にとって考えてみると、備忘録としての元来の日記に於いては、日付はそれ自体記録的な意味を持っていたものである。つまり某月某日という日付があることによって初めて記録的価値がある記述となるのであり、記述に日付が附記されるのではなく、日付が記述に先行しているのが日記の通常形式なのである。ところが日記形式の紀行文にとっては、この日付の意味は、紀行の展開即ち空間移動の連続性を導く補助的な役割として働くことが第一義となり、時間の記録性としての意味は一步後退することになるのである。

以上のような作品化の作用を備えた日記形式による紀行文が南宋期に隆盛するようになった背景には、旅という行為が遊覧意識を伴うものとなってきたこと、また当時古文運動の波及や口語文の広がりによって、身辺雑事を駢儷文のような複雑な修辭によらずに表現する散文の形態が定着していたことを要因の一端に挙げることが出来るよう。

二

南宋期の紀行文の基になった原日記は現存しないため復原することは不可能だが、編集作業の形跡は作品の上から窺知できる。その最も端的な具体例は冒頭部分に現れている。

乾道五年十二月六日。報を得て、通判夔州に差せらる。方に久しく病み、未だ遠役に堪えず。夏の初めを以て郷里

を離れんことを謀る。

六年閏五月十八日。晩行き、夜法雲寺に至る。兄弟餞別し、五鼓始めて決去す。

十九日。犁明、柯橋館に至る、……（以上『入蜀記』冒頭）

乾道六年閏五月戊子。成大命を被むるに資政殿大学士を以てす。崇信節度使康誥と与にす。奉使大金国信使副^た為り。

六月甲子。国門を出づ。（以上『攬轡録』冒頭）

石湖居士。乾道壬辰十二月七日を以て呉郡を発し、広西に帥たり、船を姑蘇館に泊す。

十四日。盤門を出づ。大風雨もて行かず。赤門湾に泊す。

十五日。赤門を発す。（以上『騷轡録』冒頭）

石湖居士、淳熙丁酉の歳五月二十九日戊辰を以て成都を離る。是の日、舟を小東郭の合江亭の下に泊す。……（以

上『呉船録』冒頭）

これらの紀行文の冒頭は、いずれも紀行の展開を導く序章の役割を果たすように編集作業が施されている。

その先ず第一の点としては、冒頭の一条が必ずしも旅の出発点とは一致せず、赴任の命を受けた日の日記の記述となっている点である。この冒頭の一条は『入蜀記』『攬轡録』では実際の出発日までとの間に時間的空白が設けられており、旅の行き先や経緯を予め提示するために意図的に原日記から抽出されたものである。この冒頭の一条は紀行文にとって極めて重要な意義を有している。何故なら冒頭を読むことによって、読者は予め地理的な空間移動即ち旅程を展望し、旅の展開をある程度予測することが可能になるからである。つまり冒頭の一条が紀行の全貌を知らしめる序章に相当するのである。これによって読者は既にして途次の名所旧蹟、各々の土地と関連の深い詩文或いは自らの体験などを

それぞれに思い入れて想起しながら、紀行文が導く作品空間の世界に入っていくことが出来る。これは紀行という主題が実際の土地に見聞した記録文学であり、作品空間を読者と共持していることによるものである。

以上のように冒頭で紀行のあらましが示唆されることによって、紀行文が無秩序な日次記ではなく、一貫した主題に基づいた作品としての日記であることが明示される。しかも独立した序があるのではなく、日記の一日分が序の代替として置かれているのであり、あくまで日記形式の紀行文の一環として、同じ時間軸の流れの作品空間の中で語られているのである。このように考えてくると、『入蜀記』『攬轡録』の冒頭部分は、実際の紀行に際しての記述が連続的にほぼ日を追って展開しているのに対し、時間的空白を設けて独立させ、序章的意味合いを明確にするために意図的に日記形式を用いたレトリックであると考えられる。つまり冒頭の一条に日付が附されていることによって、その時点から作者の意識にあった旅が始まるものとして、その間の語られない時空間は紀行の準備期間として読者に了解されるのである。但しこのように赴任の命を受けた日などを冒頭の一条として置く例は、前出の『来南録』に於いても当てはまり、南宋期の紀行文に始まった特有な編集作業と言うよりは、中国の日記形式の紀行文にかなり普遍的な形態であると言える。

冒頭部分の編集作業の第二点としては、范成大の「石湖三録」全てに当てはまる特徴であるが、傍線を施したように作者の号または名つまり行為者が作者自身であることが明示されていることに現れている。何故なら、備忘録としての原日記であれば、わかりきった事実として記載されていたとは考え難いからである。従ってこの点もやはり読者に対して自身の体験の記録であることを表明したものと考えられる。比較のために欧陽修の『于役志』の冒頭部分を例に挙げてみる。

景祐三年丙子の歳、五月九日丙戌。希文知饒州に出づ。

南宋期の紀行文に於ける時空間表現をめぐって

戊子。希文を送りて祥源の東園に飲す。

希文とは范仲淹の字。『于役志』は范仲淹の失脚事件での裁定を批判したために夷陵（湖北省宜昌市）に貶された時の紀行文である。右のようにわざわざ年月日が明記されており、作品化に際しての編集作業が施されていることは明白である。しかし范仲淹の事が冒頭の記述となっていて作者自身の紀行の出発点には相当せず、またどこへ向かう旅なのかは読み進めていかないとわからないため、作品の完成度という点では南宋期のものに及ばない。この点を比較すると、南宋期の紀行文は作品化した主題が明瞭に冒頭に凝集されていることが頷けよう。⁽⁴⁾

そして更に『驂鸞録』『呉船録』に於いては、日記の一日分という形をとりながらも、先述した日付の後に記述がなくという日記の形式が破綻している。この二書が第一点の特徴としての出発点との間の時間的空白を設けていない理由は、日記の形式を破綻させたことによって既に序章として置かれた一条であることが明白であることによるのかも知れない。この場合、記録としての日付は明示されているが、原日記に於ける時空間の流れとは乖離した完全に閉じられた作品空間が創られているのである。逆に日記形式がそのまま用いられている前二書に於いては、作品としての時空間と原日記の作品化されなかった前後を含めた連続しているはずの時空間は共通しており、時間の連続性という点に関しては編集作業によって異化されてはいない、という相違が見られる。

三

現在我々が見るかぎり、南宋期の紀行文は記録としてかなり正確かつ綿密である。紀行期間中の日記はほぼ毎日欠かさずに記述されていたようである。それ故にこそ冒頭部の時間的空隙が作者の意図的なレトリックとして効を奏しているのである。だが編集作業は冒頭部分に限られている訳ではない。そこで以下では紀行文の日記としての連続性という

点に着目してみたい。

日記が毎日書き続けられ習慣化するには、記述の形態あるいは内容がある程度定型化することが必要であろう。⁽⁵⁾ 紀行に際して多く日記が書かれ、また日記が継続することの大きな要因に、空間移動の記録、つまり一日のうちの出発点（或いは到着点）や立ち寄った土地名を記すという毎日記録すべき事項があることが挙げられよう。初期の日記形式の紀行文である『来南録』が概ね途次の宿泊地の記録に終始し、その他の状況の描写はごく簡略であることなどが一証となろう。南宋期の紀行文の原日記についても、日付に続いてこのような習慣的に記載すべき日記の定型があったことが日々の記述内容の充実を促したものと考えられる。

一日の記述に先立って日付が先ず記載されるのが日記の形式であることは既に述べたが、毎日の日付の記載という行為は暦の役割をも兼有していたと思われ、日付が跡絶えてしまうということは考え難い。従って記述が無い日の処理には、日付のみが書かれるか、作品化に際して日付を削除してしまう場合が考えられる。『入蜀記』では紀行の前半部分（陸游の故郷の山陰の近辺）に於いては無記の日がしばしば見られるが、日付だけは記されている。故郷近辺の見慣れた風景の中ではさほど記述すべき事項が無かったためとみられるが、この原日記の形態をそのまま作品の上で反映させた理由は、記録文学としてのリアリズムを重視し、編集の際に虚構性を介入させてはいないということの読者に対する表明とは言えないだろうか。日付が跡絶えていないことによって時空間の連続性は保たれるのであり、自ずと冒頭部分の意図的な時間的断絶のある日付を伴わない無記とは性質を異にしている。これに対して「石湖三録」では日付を削除してしまっている。但し『鰲鸞録』『呉船録』では無記の日そのものが見られないほど綿密な記録となっている。両者のこのような間断ない時間の連続性は、当然ながら一日の到着点と翌日の出発点は一致するという空間的連続性を導いていると言えよう。

しかしながら、『膠鸞録』『呉船録』では日付が毎日連続しているわけではなく、数日分を一条の項として編集している例が頻繁に見られる。

(閏五月) 二十一日より二十四日に至る、皆な兄が家に留まる。(『入蜀記』)

『入蜀記』の例は右の一例のみであるが、『膠鸞録』に十例、『呉船録』に九例見られる。

(二月) 二十一日、二十三日、皆な信州に泊す、此より復た舟に登る。

(閏一月) 十九日、二十日、二十一日、二十二日、皆な袁州に泊す。仰山の勝を聞くこと久し。城を去ること遠しと雖も、今日特だ往きて之に遊ぶ。……

(二月) 三日始めて湘江に汎ぶ。此より六日に至る。早莫行く。倦めば少休し、復た地名を問はず……

十六日、十七日。衡永の間を行く。……(以上『膠鸞録』)

数日が一条に纏められる場合は、傍線を施した「皆な〆に泊す(留まる)」という表現からもわかるように、同じ場所に滞在し空間移動がない場合、もしくは同じ行動がその間継続している場合に限定されている。これらの例が、毎日の日付が連続する原日記の形式を破綻させて意図的に編集作業を施したものであることは明白である。これらの編集作業は、何も言及されない日が出来てしまうというわけではないので決して時間的連続性を損なうことなく、しかも記述が単調なりフレインとなることを防いでいる。紀行文が空間移動を連続的に描くことを主眼としているならば、その意味ではこの編集はむしろ主題からの逸脱を少なくしているものと言えよう。

「石湖三録」のうちの『攬轡録』は恐らく公的な記録として上奏された時の形を保存していると思われるが、他の二書ほどに綿密に時間が連続しているものではない。金への使者としての公的記録は、同じく紀行文とは言うものの、私的な行程の連続的記録が求められるのではなく、金国の現状と両国間の折衝の様子などの報告書として編集されたため

であろう。やはり使者として臨安（浙江省杭州市）から金に赴く往復の旅の日記形式の紀行文である周燁の『北轅録』、樓鑰の『北行日録』は『攬轡録』と全く行程を同じくする。その中、『北行日録』だけは、正旦を賀す一行に随行した樓鑰の、上奏を目的としない私的な紀行文であり、往復する間一日の断続も無い克明な日記となっている。一方、公的記録である他の二書は、国境を越えて金国に入った時点から記録が詳細になり、帰路については重要な地点の日記のみを原日記から描出した簡略なものであり、主題を浮き彫りにするために原日記の余分な記事は切り捨ててしまった例であろう。私的な紀行文の場合は、自らの足跡そのものが記述の中心となるため、日記の時空間の連続性が優先され、結果的に時空間表現の上では克明な記録となったものである。しかもこれら三者は同じ行程であるにも係わらず、『北行日録』と『北轅録』が俱に帰宅した時点到着点としているのに対し、『攬轡録』は国境である淮河を渡ったところで筆を置いている。つまり、紀行文の出発点と到着点をどこに置き、行程のどの地点に言及するかという作品空間の創造は、作品化する編集の段階で作者の紀行の位置づけによって決定するということが、これらの例から実証されよう。

四

以上の論点は、南宋期の紀行文が日記形式によるという点にこだわって、その時空間表現の特徴を考察してきたものである。その際、日記が一日を単位とするエクリチュールの連続的反复であり、日記に於ける叙述は一日という時間の枠によって限定されていることを暗黙の前提として時間の連続・非連続性を論じてきた。しかし視点を一日より更にミクロな時間の単位に置き換えてみるならば、この連続・非連続の観念は厳密でなくなる。では一体一日の間の空間移動はどのように叙述されているのであろうか。

一日の間の記録という点に於いても、南宋期の紀行文は先行する『来南録』や『于役志』よりも一層綿密なものとな

っている。これらの簡略な紀行文では「次(宿)」「至(到)」「過」という形で一日の移動を一括して述べてしまふ場合が大半である。少し詳しい記述についても「晨」「夜」という時間表示が為されているに過ぎない。但し『干役志』に於いては一箇所「丁巳。洪沢に次す。……遂に四人の者と夜飲す。五鼓罷む。……二鼓闌下に宿る。黎明元均来たる。……」(六月十日)と、始めて更鼓による時刻表示が見られる。当然のことながら時代が下るにつれて次第に記録性が綿密なものとなる。

南宋期の紀行文では勿論更に一層綿密になるが、面白いことに一日の間の空間移動の記録に関しては、『入蜀記』と『石湖三録』とでは提示の仕方の傾向に相違が見られる。『入蜀記』では空間移動が時間によって示されている場合が多いのに対し、『石湖三録』に於いては距離によって提示する形が多く採られているのである。

先ず『入蜀記』の例を挙げてみる。

(閏五月)十九日。黎明柯橋館に至り、送客に見ゆ。巳時餞清に至る。……申後蕭山県に至る。夢筆駅に憩ふ。……二鼓帰る。四鼓舟を解き、行きて西興鎮に至る。

右の例のように自らの足跡を時間の推移に従って経過を追いつながら克明に記録している。しかもその提示の仕方は、十二辰や更鼓といういわば時計表示の時刻による正確な記録となっている。勿論このようにいつも詳細な提示があるとは限らないが、全般的に一日の出発点と到着点に当たる朝と夕(夜)については言及されていることが多い。

(六月)十一日、五更楓橋を発し、曉に潯墅を過る。……夜鼎駅に泊す。……

十六日、早に雲陽を發す。……夜鎮江城外に抵る。是の日立秋たり。

一日の行動を、「朝発夕至」と対句的に朝・夕を提示して総括する表現は伝統的な修辭法かとも思われる。『楚辭』離騷の「朝に軻を蒼梧に發し、夕べに余皇圃に至る」という表現方法は文体のジャンルを問わず、とりわけ旅を主題と

した文学表現に散見する。

朝に軻を長都に発し、夕べに瓠谷の玄宮に宿す。(班彪「北征賦」『文選』卷九)

朝旦に陽崖を発し、日落陰峯に憩ふ。(謝靈運「南山於^より北山に往かんとして湖中を経て瞻眺する一首」『文選』

卷二十二

このように朝・夕(夜)の所在地が記録されることは、読者が一日の間の空間移動の状況を推測し補完することが可能となる最低限の提示である。『入蜀記』に於ける時間表示には、このような記録的意味に加えて、また修辭的な意味に於いても伝統的表現が敷衍して継承されているとは言えないであろうか。

それに対して、「石湖三録」では『入蜀記』のような緻密な時間表示は為されていない。『吳船録』を例にとると、時間表示があるものは全体の三分の一程度で、しかも十二辰・更鼓による提示となると八例と少ない。このように時間表示は少ないが、自らの足跡の経過は地理的な距離表示によってやはり克明に記録されている。

(六月) 庚午。二十里、早に安德鎮に頓す。四十里、永康軍に至る。……

(七月) 己酉。合江を発し、二百四十里、恭州江津県に至る。二十里、漁洞を過り、泥培村に宿る。

『入蜀記』に於いても距離が提示されている例は少ないが、その使われ方に明らかに相違が見られるので比較のために列举してみる。

(七月) 四日。……晚竹篠港に泊す。居民二十余家有り。金陵と距たること三十里。

(八月) 四日。是の日、風に逆らひて舟を挽く。平旦より日昃に至る、纔かに行くこと十五六里。……

二十二日。……晚白楊夾口に泊す。鄂州と距たること三十里。……陸行すること止^ただ十余里。……

以上の点から明らかなように、距離を記している点では同じであっても、両者の提示の方法は大きく違っている。

『呉船録』では作者の自らの足跡に従ってその進行した距離が記録されているのに対し、『入蜀記』ではある地点の場所を標準となる地点からの距離で説明したり、特定期間に移動した距離を確認したりする形で用いられている。『呉船録』で見られた特徴は「石湖三録」の何れに於いても凡そ当てはまり、范成大の特徴であると言えよう。

では、この両者の相違をどのように考えたらいいのであろうか。空間を距離によって認識するためには、常に自らの位置を標準とする地点との対比のもとで認識している必要がある。この距離による空間表示は極めて普遍性をもっている。そこでこの方法は地理書のような客観的説明に多く用いられ、古くは『水経注』『山海経』などから、その影響を受けた征記類⁽⁶⁾にも見受けられる。距離によって示された空間は、読者にとってみれば地図上で確認しながら紀行を想像することが容易である。しかしそれだけに逆に後から補正することも可能であり、即時性、自らの体験としての特異性を欠き、地誌的な説明的記録とも見做し得るものである。一方、時間による空間表現は、作者の行動に付随する一回性の事実の記録であり、作者の自叙伝的記録性を有するものと言えよう。

范成大と陸游に於いては、以上のように空間表現の点で相違が見られた。そしてそれは彼らの空間認識の違いによってもたらされた結果であると考えられる。范成大が距離による表現を採った背景には、彼の最初の紀行文が『攬轡録』という公的記録であったことが左右したのではないだろうか。しかし両者何れの場合にも、記録に正確さを期そうとしている点で共通の意識があることが窺知される。

おわりに

南宋期の紀行文は日記形式を定着させたことによって、時空間表現の上で様々な特徴が見られた。本論文では記録という点にこだわって論じてきたが、言うまでもなく無味乾燥な記録的価値だけの紀行文であっては多数の読者を獲得す

るには至らないであろう。紀行文という記録文学は、読者が作者の紀行を追体験することを通して、未知の土地を見聞したような臨場感を味わうことに醍醐味があるのである。旅程のそれぞれの土地の自然の景観の描写の表現こそが読者を魅了し、現在尚おその精彩を失なわないのである。

南宋期ともなると、赴任のための旅といってもかなり遊覧意識の強いものであり、事前に名所旧蹟の下調べをした上で実際に見て確認し発見する旅であったようである。「家属已に行けども、独り微雨を冒して郷林及び盤園に遊ぶ。『膠鬲録』閏一月十四日」といったように多少の無理をしても遊覧の予定を敢行している。

昔嘗て我眉・双溪は廬山・三峡に減ぜずと聞けり。前日之を過るに真に奇絶たり。竜門に至るに及びては、則ち双溪も又下風に在り。蓋し天下の峽泉の勝、当に竜門を以て第一と為すべし。要は之きて遊ぶ者自ら知らん。未だ之きて遊ばざる者は必ず余が言を以て過と為さん。『呉船録』七月戊戌朔

江州より此に至ること七百里、流れを^{さかのぼ}る。日々便風を得ると雖も、亦た三四日を須つ。韓文公の益城鄂渚を去る。風便ならば一日のみと云へるは^{あやま}過りなり。蓋し退之未だ嘗て此の路を行かざるならむ。『入蜀記』八月二十三

日)
彼らの紀行文には実に多くの詩文が引用されているが、それは詩文での理解を實際に感得することで見聞を広め、そしてまた紀行文として作品化することを充分念頭に置いた上で原日記を記述したことに起因しよう。こうしたことから、一日の記は自ずと〈遊覧〉の記として独立させて読むに堪え得るものも多いのであろう。南宋期の紀行文が後世の紀行文に与えた影響は日記形式という表現形態のみにとどまるものではない。それは従来の〈紀行〉の本質に、山水遊記に代表されるような〈遊覧〉の性質が融合され陶冶されることによって、一文学ジャンルの先蹤となっているのだと言うことができる。

注

- (1) 吉川幸次郎『歴代賦集』影印本解説」中文出版社。
- (2) 周煇『清波雜志』に「元祐の諸公皆日記有り。凡そ榻前の奏対の語及び朝廷の政事、一時の人材の賢なるや否や、之を書くこと惟れ詳し。」と述べられ、『直齋書錄解題』巻七〈伝記類〉には王安石の『熙寧日記』四十卷、司馬光の『溫公日記』一卷などが著録されている。また全く私的な日記としては黃庭堅に『宜州家乗』と題される彼の死後弟子が刊行した日記が現存する。
- (3) 伊藤正文「所謂『紀行』の賦について——『遂初賦』『北征賦』をめぐる——」(『小尾博士古稀記念中国文学論集』汲古書院所収)に「現存する『紀行』の賦、特に後漢期の作品は殆ど史家の手になる。班彪・曹大家は勿論のこと、劉歆は『左伝』を大いに好み、蔡邕は『漢志』の続成を志した人である。『紀行』の賦が、土地を経歴して今に感じ古えを思うて作るものであり、『紀伝を歴叙』するのが創作方法となる以上、史家には甚だ適した賦類と言えよう。」という指摘があり、〈紀行〉の文学作品の草創とも言える〈紀行賦〉がやはり史家の手になるという点で共通性がみられる。
- (4) 紀行文の冒頭で出発日、行き先、行為者が明示されることは、記録性が第一義ではない〈紀行賦〉についても「惟れ永初の有七。余は子に随ひて東に征けり。時れ孟春の吉日、良辰を選びて将に行かんとす。(曹昭「東征賦」『文選』巻九)」「歳玄枵に次り、月蓂賓に旅る。丙丁日を統べ、乙未辰を御る。潘子賦に憑りて西に征き、京自り秦に徂く。(潘岳「西征賦」『文選』巻十)」と同様である。
- (5) 紀田順一郎「日記の研究」(『日記の虚実』新潮選書所収)に、日記が習慣化されるには「動機」の他に日常を記録するためのコツがあり、日本人の場合にそのコツは天候を記すことだという極めて示唆に富んだ指摘がある。
- (6) 小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』岩波書店の第二章 三「征」記と「征」賦に引用されている郭縁生「述征記」戴延之「西征記」伏滔「北征記」などを指す。